



タイトル **なぜ世界は不幸になったのか**

著者 適菜 収 (てきな おさむ)

出版社 角川春樹事務所

発売日 2014年12月8日

ページ数 204 ページ

著者は大衆社会論から政治論まで幅広く執筆活動をしている哲学者である。本書には 29 人の哲学者や思想家が登場するが、彼らが共通して指摘しているターニングポイントがある。それは「近代」である。

我々は、「近代」に発生した迷妄の中で、暮らしている。そこでは、時間の経過とともに人間性が失われていく。自由や平等、民主主義が称揚され、それに対して誰もが疑問を持たなくなった時、「近代」は完成し、人類は解放という名の鎖につながれ、開明という闇の中に永遠に閉じ込められることになる。

著者は、「近代」から脱出するのは不可能だという。ただ、人間は「言葉」を持っているので、近代に汚染される以前の時代の「言葉」、近代の悪に抵抗してきた先人の「言葉」を手掛かりにすることが出来るという

本書は、真っ当な人々、賢者の警告を紹介し、現代社会の問題点について一緒に考えようと読者に呼びかける。

さっそく、目次を見てみよう。

はじめに

第1章 私たちは何を読み、何を読むべきではないか？

アルトゥル・ショウペンハウエル「古典を読もう」、新渡戸稲造「本はたくさん読むな」、ジャン・バティスト・ヴィーコ「本を遅く読む技術」

第2章 「言葉」の破壊が不幸な社会を生み出した

ジョージ・オーウェル「言葉の破壊の行きつく先」、プルタルコス「おしゃべりは身を滅ぼす」、カール・ヤスパース「哲学は結論を拒絶する！」、岡潔「わかるとはどういうことか」

- 第3章 私たちが最後に「保守」すべきもの  
三島由紀夫「国土より大切なもの」、マイケル・オークショット「保守的であるということ」、福田恒存「“保守主義”という矛盾」
- 第4章 「歴史は進歩する」という妄想  
ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ「先人に“上から目線”の愚」、小林秀雄「答えが出ない問題」、西田幾多郎「決断にスピードはいらない」、エドワード・ハレット・カー「“正しい歴史認識”とは何か」
- 第5章 なぜ、ある種の間人は「改革」が好きなのか？  
ハンナ・アレント「正義は法に優先しない」、ジョン・アクトン「権力は腐敗する」、エドモンド・バーク「“わかりやすい政治”は危険」
- 第6章 大衆社会は価値を混乱させる  
ホセ・オルテガ・イ・ガセット「“B層”グルメに群がる人々」、フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ「素人の暴走と価値の錯乱」、セーレン・キルケゴール「もっと口をつぐもう」、ギュスターヴ・ル・ボン「群れることの危険性」
- 第7章 民主主義の本質は反知性主義である  
ウォルター・リップマン「“民意に従え”は政治の自殺」、福沢諭吉「官僚悪玉論の愚」、山本七平「“民主化”が足りない」、シャルル＝ルイ・ド・モンテスキュー「三権分立で権力の暴走防げ」
- 第8章 政治家になってはいけない人物  
マックス・ヴェーバー「政治家の資質について」、開高健「木を見て森を見ない人々」、ニコロ・マキャベリ「統治者の条件とは」、アレクシス・ド・トクヴィル「民主主義に内在する“悪”」
- おわりに 賢者に学ぶ

過ちは何度も繰り返される。だから、過ちに対する警告は、何度も繰り返さなければならない。石原慎太郎や橋下徹のようなアナーキスト、小泉純一郎や安倍晋三のようなグローバリストが、「保守論壇」に支持されてきた。

この20年にわたり、「改革」、「革新」、「革命」と騒いできたのは、鍵カッコつきの「保守」であり、国家の解体が権力の中核において進められるというグロテスクな現象が発生しているのが現在だ。もっといえば、戦前、戦中、戦後を通して、我々日本人は、近代啓蒙思想に基づく「改革幻想」に支配されてきた。我々が克服しなければならないのは、改革に対する根拠のないオプティミズムであると著者は言う。

冷戦時代で思考停止した単なる反共、あるいは旧来の左翼批判、中国や韓国、朝日新聞、毎日新聞、日教組批判を朝から晩まで繰り返している連中の決定的に駄目なところは、「敵」が旧来の衣装をまとって社会の解体を図ってくると深く信じていることだ。「敵」もそれほど愚かではない。彼らは姿を変えて、次の夜明けを準備しているのである。

現在、「保守を偽装する連中が、我が国の全体主義化を図っている。そして、この手の運動はほぼ成功していると言える。要するに、今の日本は完全に左傾化しているのである。

すなわち、改革幻想、グローバリズム幻想、国連幻想、および「近代化＝善」という左翼イデオロギーに乗っ取られているのである。

首相公選制（国民の直接選挙で首相を選ぶ）、裁判員制度、一院制の推進などなど。人類の知の歴史を完全に無視した愚策が国会で大真面目に論じられ、グローバリズムの弊害がグローバルに噴出する中、「もはや国境や国籍にこだわる時代は過ぎ去りました」と発言するような総理大臣まで誕生してしまった。我が国の「保守派」には、それを批判する気力も能力もなかった。

2012年8月10日、韓国の李明博大統領が、竹島に不法上陸した。さらに、天皇陛下の訪韓について「死亡した独立運動家への心からの謝罪が必要」と発言。超えてはならない一線を越えてしまった。

この件で一番損をしたのは韓国である。国際的な立場も危うくなった。我が国の時の政権はテレビカメラの前で激高して見せたが、茶番にしか見えなかった。そもそも領土以前にもっと大切なものが失われているのではないか？

三島由紀夫は、一番重要なものは国土ではないという。「地域共同体が崩壊してしまった中で、いったい国とは何かと問われると、仕様がなから国土だと言い、その国土を外敵から守るのが防衛だ、と答える。しかし、その国土というのは単なる地面であって、これがたとえ共産政権になったとしても、何の変りもない」。それでは、何を守るのか？

三島は、「日本というものの特質で、それを失えば、日本が日本でなくなるというもの」であるという。それは、「日本精神」などといった抽象的なものではない。あくまでも現実世界に存在するものだ。三島は「能」を例にして説明する。

「日本の美は最も具体的なものである。世阿弥がこれを「花」と呼んだ時、我々が花を一理念の比喩と解することは妥当ではない。それはまさに目に見えるもの、手に触れられるもの、色彩も匂いもあるもの、つまり「花」に他ならないのである。

我が国の「美」は概念化を拒絶する。我々が守らなければならないのは、こうした日本の伝統であり美意識である。美術、文芸、料理、そして歌舞伎、能、文楽といった芸術にそれは具体的な型として現れている。

2012年7月26日、文楽協会への補助金凍結を表明していた大阪市長の橋下徹は、近松門左衛門原作の「曾根崎心中」を鑑賞し、終了後に、「ラストシーンでグッとくるものがなかった」、「演出不足だ。昔の脚本を頑なに守らないといけないのか」、「演出を現代風にアレンジしろ」、「人形遣いの顔が見えると、作品世界に入っていけない」などと持論を展開した。長年にわたり引き継がれたものが理解できなければ、自分の側を変えるべきだと思うのが真っ当な人間の態度である。

橋本は、我が国の根幹に総攻撃が仕掛けている。市場原理による伝統の破壊である。後日、橋下はツイッターで文楽を大衆娯楽と決めつけた上で、「自称インテリや役所は文楽やクラシックだけを最上のものとしている。これは価値観の違いだけだ。ストリップも芸術

ですよ」と頓珍漢な恥の上塗りを重ねた。

たとえ、国土が浸食されても、日本人が日本人であることの誇りを失わない限り、国が亡びることはない。しかし、伝統の破壊者に対して日本人が拍手喝采を送るようになった時、国家は内部から崩壊する。

ニーチェは、民主主義もキリスト教も、畜群（低能動物の群れ）が権力を握る社会形態だという。彼らはそれ以外の社会形態に本能的に敵意を抱いている。民主主義やキリスト教が「非寛容」なのはその為である。

ニーチェは「神は死んだ」と言った。その意味は、西欧において価値の根拠とされてきた「神の視点＝普遍的真理」を設定することが理論上不可能になったということである。

にもかかわらず、「神」は平等主義や民主主義といった近代イデオロギーに姿を変えて私たちを支配している。その根底にあるのは「神との距離において人間は等価である」という信仰だ。近代大衆社会はこうしたキリスト教本能を持つがゆえに、あらゆる格差、階層的なものを破壊する。さらに、「本当に価値あるもの」、「偉大なもの」、「新奇なもの」「卑小なもの」が評価されるようになる。その結果、芸術化気取りのゲテモノ、いい加減な知識しか持っていないのに知ったかぶりをする半可通、あらゆる領域における素人が権力を持つようになってしまった。

テレビの音楽番組では、アート（芸術）の対極にあるジャリタレが「アーティスト」と呼ばれ、ワイドショーはコメンテーターと呼ばれる人間の無責任な発言を垂れ流している。

こうした「価値の錯乱」の上に成立するのが「B層文化」である。現在、「B層」が消費の主流になっている。そこでは大企業のエリート社員が、マーケティングを駆使し、大量の資本を投入することにより、「B層」の琴線に触れるコンテンツを量産している。

例えばポップスなら、音楽そのものよりも、歌手の容姿や生い立ち、持病、スカートの丈の長さなどが重視される。

ニーチェは言う。「蓄群（前出）人間は、例外人間や超人が抱くのと異なった事物のところで美の価値感情を抱くであろう」。。。。。

蓄群はまさに「B層」である。真つ当な判断が出来ない人々だ。彼ら「B層」は、圧倒的な自信の下、自分達の浅薄な価値観を社会に押し付けようとする。そして、無知であることに恥じらいを持たず、素人であることに誇りを持つ。ありとあらゆるプロの領域、職人の領域を侵食し、しまいには社会を導こうと決心する。これこそが、ニーチェが警報を鳴らした近代大衆社会の最終的な姿である。

かつての民主党政権も素人に牛耳られていた。野田内閣の防衛相一川保夫は「自分は安全保障の素人である」と誇らしげに語り、続いて防衛相になった田中直樹は素人以前の「ド素人」だった。

閣僚から地方首長にいたるまで政治家の劣化が急速に進んだ背景には、近代イデオロギーによる価値の錯乱という問題が潜んでいた。。。。。

市民運動や市民デモの訴えの多くはほとんど意味がない。彼らが依拠するのは知性ではなく、数の論理であるからだ。集会やデモを行う市民団体が毎回のように参加者数の水増し発表をするのは、その本性を示している。

キルケゴールは、市民の本質を「第三者」、「傍観者」と規定している。一人の人間が情熱を傾けて、自分に与えられた使命を果たそうとするとき、また、彼らが手を組むときには集団も意味を持つ。そこでは、知性と覚悟が重視される。しかし、平等化された近代社会においては、傑出した人間は軽視され、疎まれ、引き摺り下ろされる。そこに働くのは嫉妬の原理である。そして、個人が完全に等価になった結果、価値判断の道具として、多数決が導入される。そこでは頭数を揃えることだけが求められる。キルケゴールはこうした野蛮を批判したのである。

ところが今日では、誰でもが意見を持つことが出来るのだが、意見を持つためには、彼らは数を揃えなければならない。どんな馬鹿げたことにでも署名が25も集まれば、結構それで一つの意見なのだ。ところが、この上なく優れた頭脳が徹底的に考え抜いたうえで考え出した意見は、通念に反する奇論だといわれて反故にされる。

直接の利害関係がなくとも、メディアが拡散するあらゆるトピックに対し、誰もが一言をもつ時代である。こうした社会においては、我々は当事者意識を失い、傍観者の一人になる。逆に言えば、傍観者が社会に参加するようになる。

インターネットのブログや掲示板、SNS (Social Networking Service)、ツイッター、グルメや書籍のロコミサイトなどなど。責任不在の言葉が氾濫し、社会が声まみれになっている。キルケゴールは「おしゃべり」の危険性を説いたのである。

意見を持たないことも教養の一つである。知らないことには口をつぐまなければならない。それは発言の価値を確保するためである。「たとえ素人であっても、声を上げる必要だ」という歪んだ考え方が社会に蔓延した結果、傍観者が退屈凌ぎに社会を動かすようになった。彼らはデタラメな人物を次々と政界に送り込み、飽きれば他人事のように批判を繰り返す。

キルケゴールの社会分析は、我が国の現状にそのまま適用することが出来る。

安倍政権は、慰安婦募集の強制性を認めた「河野談話」の検証を始めるという。その結果、事実誤認や捏造が明らかになったとしても、談話を継承するという。

では何のための検証なのか。事実があればそれを認め、そうでなければ撤回するのが当然である。

ウソは、中国や韓国がやっているように、やがて歴史に移行する。いや、現在でも増殖しながら進行中である。東アジアでは、ウソが歴史になるという野蛮な時代に突入しているのである。

2015. 2. 9